

にも千世はへぬらむ、此  
歌を唱、菊綿をおかる。

〔禁中近代年中行事 九月〕八日の晚 きくわたあり、上様のきくわたには、きくわたのうへに、又ち  
いさきわた有、きくわた相すみ、御盃出ル、おこぶあわにて御いわる有り、

〔禁中恒例年中行事 九月〕九日 御菊居オキス 是は常御殿西の御椽、きり隠しといふ所の御庭に、陰陽

師大黒菊を植る、其枝に菊綿をつけさせ給ふよし、ひとりの料赤黄白三輪、九輪なり、小々小  
さき菊綿をしへの縁に置く、也、白花には黄、黄には赤、赤には白を置く、よし、女中方も付け給  
ふとなり、

〔日次紀事 九月〕八日 菊綿傳言、今日唱門師曾長大黒參禁裏、種菊於常御殿之前庭、明朝官女等取  
綿使蒙階下菊花、是謂菊綿、又稱衣綿、傳言、菊綿插小兒衣領之内、則無疾

病云、故節  
後願賜之、

〔伊勢集 下〕九月八日、隣より菊にわたおほひにおこせたりける、朝にほりてやるとて、  
數しらす君がよはひをのばへつ、なたゝる宿のつゆとならん

返し、まさたゝ、

露だにもなたゝるやどの菊なれば花のあるじやいくよなるらん

〔忠見集〕九月九日に、菊のわたおほひたり、

花の香をけさはいかにぞ君の爲まゆひろげたる菊の上の露

〔紫式部日記〕九日寛弘五 菊の綿を兵部のおもとのもてきて、これとの、うへの、とりわきて、い

とようおいのごひすて給へと、のたまはせつるとあれば、

菊の露分るばかりに袖ぬれて花のあるじにちよは譲らん

〔枕草子 二〕九月九日の曉より、雨すこし降て、菊の露もこちたくそぼち、覆ひたる綿などもいたく  
ぬれ、うつしの香も、もてはやされたる、つとめては、やみたれど、猶くもりて、や、もすれば、降り落